

大学で培った“多角視点”が キャリアの幅を広げ続ける!

ネットワーク情報学部在学中に関わったプロジェクトで、
様々な意見をまとめる経験をし、大きな学びを得た瀬谷さん。
大学卒業後ベンチャー企業で3年間勤めた後、華麗な転身を遂げることになる。
自らの可能性を高め、新たな道を切り拓く秘訣を聞いた。

せや・ひかる ●1993年生まれ、埼玉県出身。専修大学ネットワーク情報学部卒。2015ミス専修大学グランプリ受賞。現在はレースクイーンのほか、FXの情報を届ける「マネバナビゲーター」としても活躍。芸能事務所「スリーライズ」に所属。

Instagram https://www.instagram.com/seyas_h/

Twitter @hikaru_seya



2021年7月17日 スーパーGT 第4戦 予選。ツインリンクもてぎ（撮影当時、22年3月より「モビリティリゾートもてぎ」に名称変更）にて（撮影=松永和浩）

タレント・レースクイーン 瀬谷ひかるさん (平28・ネット)

国内外のGTカー（Grand Touring Car：長距離を快適に移動可能な高性能車）をベースにしたレーシングマシンで競う「スーパーGT」。そこでレースクイーンとして活躍するのが、瀬谷ひかるさんだ。

華やかな世界に身を置いているが、もともとはコツコツと積み上げていくタイプだった。そんな彼女が、どのようにして、現在のよう活躍をするようになったのだろうか。

自分に最適な道を模索。 プロジェクトでは、中枢を担う

瀬谷さんは、高校時代にITについて学んだことから、IT関連学部の進学を目指していた。しかし、大学、専門学校ともにプログラミングやデザインなど、入学時から専攻を決める学校がほとんどで、志望校を決めかねていた。そんなとき、専修大学ネットワーク情報学部（以下、NE学部）のことを知る。

「NE学部は、1年次にIT関連の知識を一通り学んでから、専攻を選べることに魅力を感じました」

幅広い知識を得るため、受験を決意し、2012年、同学部へ進学。瀬谷さんが志望した通り、1年次にはITの全般知識を学び、2年進級時には8つのプログラムから「コンテンツデザインプログラム」を選択。ウェブサイトのUI（ユーザーインターフェイス：見た目、

操作性の最適化）、UX（ユーザーエクスペリエンス：利用者の体験価値向上）などのコンテンツ設計を学んだ。

また、学術文化会であるEDPS（電子計算機研究会）にも所属。プログラミング講座で先輩から学び、夏合宿やバーベキューイベントなども楽しんだ。このなかで、瀬谷さんは3年次になると、会計を担当するなど、その中枢で活躍した。

「勉強にも、まじめに取り組みました。NE学部では、ゼミナールの代わりに、8コースの学生同士でチームを組み、プロジェクトを立ち上げます。そして、その成果物を提出するんです」

瀬谷さんが参加したのは、幼児向けの食育AR（拡張現実）アプリ開発を目指すプロジェクト。そこで、UIデザインを担当した。フィールドワークを通じて、食育にどのような問題があるかをヒアリング。実際に子育てをしている方や、大学周辺にある保育園の先生からも意見をうかがった。

さらに瀬谷さんは、プロジェクトの進行役として、専攻が異なり、別々の知識と感性を持った学生たちをまとめることに。個人的で、自己主張の強いメンバーの意見を調整して、進む道を決めることほど難しいことはない。ただ、これを経験することで、物事を多面的に捉える大切さを学ぶ。多様性の時代、広い視野を持つことは貴重だ。これが、彼女にとって大きな財産となる。

学部イメージを変えるため ミスコンに挑戦

瀬谷さんは、4年次になったとき、やり残したことがないかと、これまでの学生生活を振り返った。

「NE学部は当時『オタク学生』みたいな印象がすごく強かったので、イメージを変える意味で、ミスコンへ参加

しました。後々、この学部からも出場する先輩がいたんだ、と後輩に思ってもらえたかったので（笑）」

当時のミスコンは、年度始めにエントリーが行われ、6月ごろに投票でファイナリストを選出。その後、ファイナリストは、テレビ局のイベント参加といった活動を行う。このとき、自己アピールのために、特技を披露する。

「私は、カラオケが得意だったのでステージで、『ユー・レイズ・ミー・アップ』を歌いました。ファイナリスト5人のうち、3人はなにか賞がもらえるということで、せっかくなら、入賞したいと思っていましたね」

そして、インターネット投票を募った後、鳳祭の当日、その結果と現地投票を合算して、決着を迎える。

ほかのファイナリストは全員3年次で、4年次は瀬谷さんだけという状況のなか、見事にグランプリを獲得した。「学部のみんが、ネット投票をしてくれたおかげだと思います（笑）」

広報活動への憧れ、 華麗な転身で実現

瀬谷さんは大学卒業後の16年に、通信ネットワークを全国展開するITベンチャー企業に入社。プレス（広報）を志望していたが、商業高校で簿記を学び、大学時代の4年間、不動産事務のアルバイトなどをした経験を買われ、総務、経理を担当する。

若手社員として活躍の場を与えられていたが、当初の希望であった広報業務に携わることなく、社会人3年目の夏を迎えたところだった。

「ある日、好きなコスプレイヤーさんの撮影イベントがあって、会社帰りに参加しました。そこで、その人のマネージャーさんから声をかけられ、レースクイーンをやってみないかと、ス



瀬谷さんはレースクイーンやコンパニオンが多く所属する事務所、「スリーライズ」に所属している

カウトされました」

これが瀬谷さんの、転機となる。「いまだから、できる仕事だ」と、挑戦したい気持ちが芽生えてきた。

「もともと、就活時は広報という職種を目指していましたが、その業務に関われない自分がある。でも、レースクイーンは、まさに広報ではないかと考えました。所属するチームを宣伝するほか、イベントコンパニオン、MCとして企業PRに関わっていますので、広報戦略の流れを自ら実感しています」

「スーパーGT」に所属するチームで、レースクイーンを務めることは狭き門だ。この仕事に就けるのは、競争を勝ち抜いた人のみで、200名もいない。

「毎年、事務所からエントリーし、書類審査を通過して、11月から2月にかけて行われるオーディションに臨み、合格すれば、4月からのシーズン開幕に合わせてチームに参加します」

18年に会社を辞めて、事務所に所属した瀬谷さんは、その年末にオーディションを受け、19年からレースクイーンとしてデビューする。

「1年目は、伊藤忠エネクスがスポンサーする“TEAM IMPUL”に参加したんです。一部上場企業が出資

する組織の一員として、相応に振る舞うことが求められました」

このチームは、現役時に日本一速い男と呼ばれた星野一義監督が率いる名門。競争倍率は、およそ40倍だ。

また、身体の露出を控えた衣装を身につけるなど、品位も重視される。ここで、チームをサポートするレースクイーンとしての基礎を学んだ。

「2年目、3年目はホンダアクセスのModuloという純正アクセサリーブランドのイメージガールに。レースクイーンとして、元F1レーサーの中嶋悟さんが監督する『Modulo Nakajima Racing』に所属しました」

見方を変えれば、 世界が広がる

デビュー以来、トップチームに所属し、華々しいキャリアを重ねたが、新型コロナウイルスの影響により、仕事が激減したという。

「20年は全8戦のうち半分が無観客

ミスコン書類審査通過後、ファイナリストとして用意した写真。カメラが好きな同級生が撮影してくれた一枚



となり、私もチームに帯同ができなくなりました。そのときは、公式Twitterでレースの実況をしましたが、NE学部で学んだ、UXデザインに関する知識を役立てることができました」

専修大学時代でのさまざまな経験は、レースクイーンとなっても、おおいに活かされているようだ。

「モータースポーツというこれまでまったく馴染みのなかった世界に飛び込んで、スポンサー、監督、ドライバ

一、メカニックと、チームが一丸となって挑む熱気に出会いました。各分野の専門家が同じ方向を向いて目標を目指すというのはNE学部でのプロジェクトに近いものがあります。専大での学びで培った、ひとつの物事をいろいろな視野で捉える力が社会でも、結果を出すために必要なことがわかります」

この世界に飛び込んでから、3年が経過。多くの経験を積むことによって、スポンサー企業やチームの名前を背負うことにあらためて身が引き締まる思いで臨んでいる。

「現在は仕事の幅を広げ、大型ゲームイベントのMCなども担当しています。まったく知らない業界に進んでも、心配はありません。これまで学んできたことが自信になっているからです」

最後に、瀬谷さんから、校友に向けてのメッセージももらった。

「コロナ禍で、これまでと違ったことが多くなっています。でも、蓄積した経験が未来の扉を開いてくれる。一つの物の見方に固執することなく、多くの視点で現象を捉え、常に新たな気持ちで物事に取り組むことで、その状況を楽しみましょう」

(2022年1月24日取材)



スーパー耐久シリーズ2022 Powered by Hankookに参戦するM&Kホンダカース桶川Racing ST-TCRクラス 97号車のレースクイーン[Racer Swan Beauties]に就任が決定！初の「S耐」に意欲を燃やす。神田キャンパス10号館にて撮影

S耐 2022

検索